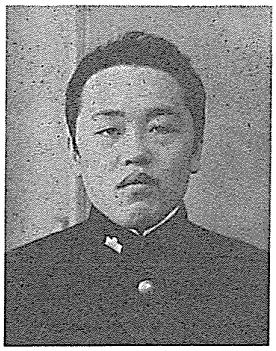
京都産業大学新聞
発行・編集
新聞局設立準備委員会

昭和53年度志学会執行委員長選出

産大自治の新たなる
飛躍と発展を担って
飯田定憲君当選

十一月十六日より三日間、展と飛躍の一翼を担っておられる飯田新志学会執行委員長に、これからの自治活動をお進めていきたいと考えます。また学生新執行委員長に選ばれた。



しかし、三日間の投票総数は一八五六票で投票率だけは一・六%と学生の無関心層の厚さを物語るものである。投票結果は次の通りである。

当　飯田定憲（営3）
　一五一〇票
　三宅秀和（済3）
　二五六票
　繁田哲夫（法2）
　七二票
無効票　一八票
投票率　一一・六%

「建学の精神」を柱としてこれからの産大自治の発展を担って行なわれた志学会執行委員ら選挙は、十九日開票を終え、飯田定憲君が一五〇八票を集めて、他を圧倒していてインタビューしてみました。

☆　☆　☆

大学自治低迷の究明

産大における自治活動の低迷について少しばかり究明を加え、さらに現代の大学生像、大学の使命について考えてみた。新聞局も自治活動の一環であるので、自治活動に対する学生の無関心ということについては無関心でいられないのである。

なぜ投票率が低いのか、学生が無関心なのか。無関心であっても、投票なんかしなくても今の自分の生活に直接影響はないという考えの人が大半だからであろう。今の状況に満足している現状維持派の学生が多いものと理解する。不満の多い学生が多数となれば学生の声は高まるであろうから。確かに四年間の自由な生活というものはすばらしいであろう。このような平和な大学であり。平和な社会である。又投票する自由があるということは、投票しない自由や意欲があれば、自治活動に無関心ではいられないのである。

政治のいうものは、他人に任せるものであるが、そこの根底にあるものは、国民の総意である。国民の意志が反映して政治というものが成り立っているのと同様に、学生の意見が反映して自治会が成り立っているのである。新聞局は広い視野に立って、学友全体の意見を反映できるよう努力する。自治活動がわれわれ学生の手によって委ねられたものである以上、常に学生は自治に関して活動内容についてチェックし、要望も出し自治活動を見守っていく姿勢が必要である。学友に存在している。本学においては、「自由」と「自主性」の上が無関心では産大自治の活発化は望めない。

話は変わるが、「遊び第一」「勉強第二」という大学生像、これが真の大学生の姿であろうか？　現代の「健保」など生活面の問題が残っている。学生の声を反映させこれらの問題を解決していかなければならない。

現代の大学生像と自治活動

現代の傾向として、自分も他人のことについては何も言わないし、その代わり自分も他人に干渉されたくないという相互不干渉型の人間が増えている。だからだれが委員になろうが関係がないということになる。また今の生活に満足しておりいいというエゴが優先しているのがおっくうな人がほとんどであろう。自分さえよければいいという人があるかもしれないが、大学にもらうものである。少なくとも産大に学ぶものはいくという使命があるのではなかろうか。学生が「無関心」や「四無主義」であっても、四年間の自由な生活が保障されていることに対する幸福の意識が薄いように思われる。

このような「しらけた時代」は古いというよりも、安穏とした時代は去ったといっても過言ではあるまい。

日本の置かれている位置と大学生の使命

今日本は厳しい国際状況の中に置かれている。在韓米軍の撤退は、日本・アジアの平和にとって将来どのような影響を及ぼすであろうか。また円高問題にしても何の資源もない貿易立国の我が国にとっては前途多難である。また日中友好条約についてマスコミは盟ロなどがあったので、紙を燃してごはんをたくことができた。今、ガスが止まった、電気が止まったとなると日本人は、とたんにどはんも食べられなくなる。もしエネルギーショックとか電気が足りないとなると日本中大混乱ですよ。

だからなるべくそういうことがおこらないように注意しなければならない。…」

講演の全部について話した二人とも例によって「反革命分子」と印がおされてあった。日本では絶対に見られない光景である。

日中復交以来五年、友好ムードの一色報道を受けて来た者にとってはクールな記事であった。以前から言われて来た「近くて遠い国」という印象である。

福田内閣は日中友好平和条約についての態度決定をせまられているようである。我々も「ムード」に流されることなくこの条約を考えてみる必要がある。この条約のポイントは言うまでもなく「反覇権条項」である。日本側はこれまでに宮沢四原則を打ち出しているが、中国側はあくまでもこの項を対ソ戦略としてゆずらない。またソ連側からは、この項によって日本はソ連の敵対陣営に移行するという見解が出されている。この条約を締結した時点で日中で解釈に相異が出るばりでなく日本は中ソ対立のなかにまきこまれていく可能性は高い。

中ソ対立、それは日本の平和憲法が予測もしない強烈なるパワーポリテックスの世界である。そのなかに入っての日本の国益とは何んであろうか。経済面にしても、中国側の外貨準備高や日本側の輸入品目にもまだまだ疑問がのこる。日本を敵視する中ソ条約も今お継続されたままである。アメリカの中国との接近は中ソ対立の温存と同時に中ソ両方と手をにぎるという冷徹な国益計算から打ち出されたものである。袋小路に入った日本外交はいかなる選択をするだろうか。

カレント

十一月十四日付「ニューズウィーク」のアジア面で興味ある写真を見た。それは中国で犯罪人が首かからプラカードをかけられ、トラックにのせられている風景である。二人とも例によって「反革命分子」と印がおされてあった。日本では絶対に見られない光景である。

日中復交以来五年、友好ムードの一色報道を受けて来た者にとってはクールな記事であった。以前から言われて来た「近くて遠い国」という印象である。

福田内閣は日中友好平和条約についての態度決定をせまられているようである。我々も「ムード」に流されることなくこの条約を考えてみる必要がある。この条約のポイントは言うまでもなく「反覇権条項」である。日本側はこれまでに宮沢四原則を打ち出しているが、中国側はあくまでもこの項を対ソ戦略としてゆずらない。またソ連側からは、この項によって日本はソ連の敵対陣営に移行するという見解が出されている。この条約を締結した時点で日中で解釈に相異が出るばりでなく日本は中ソ対立のなかにまきこまれていく可能性は高い。

中ソ対立、それは日本の平和憲法が予測もしない強烈なるパワーポリテックスの世界である。そのなかに入っての日本の国益とは何んであろうか。経済面にしても、中国側の外貨準備高や日本側の輸入品目にもまだまだ疑問がのこる。日本を敵視する中ソ条約も今お継続されたままである。アメリカの中国との接近は中ソ対立の温存と同時に中ソ両方と手をにぎるという冷徹な国益計算から打ち出されたものである。袋小路に入った日本外交はいかなる選択をするだろうか。

ハイジャック事件！

―テロリストと報道の自由―

座談会

何故「赤軍」という凶悪なテロリストが発生するのか――西独・日本の対応の背景にあるものは何か――。

二つのハイジャック事件を通して「報道の自由」の問題点を中心課題として花井、三好本学両教授に討論してもらった。

三好　修（外国語学部教授）
花井　等（外国語学部教授）
（敬称略）
編集部代表

西独と日本の対応

編集部　今回の日航機ハイジャック事件に於て、日本政府のとった態度と、西独のシュライヤー事件及びルフトハンザ航空事件のそれとでは日本と西独の政府の対応及びマスコミの報道姿勢というものに極めて対照的な違いを見せました。この点について先生方はどう受けとめられたでしょうか。

三好　まず、西独の場合、今回のテロ事件を一つの〝戦争〟だと考えていた。それは西独の自由な民主主義体制そのものへの挑戦だったのだ。従って、これに降伏することは西独の自由な民主主義体制の崩壊につながりかねない。だから最初からこれを戦争と考えていたんです。他の近隣諸国も、例えばフランス・英国も同様に、これを戦争と考え、西独政府に対して協力的な姿勢を表わした。それに対して日本の場合は、福田総理の「人命は地球より重い」という言葉に代表されるように、目前にある日航機内の人質の命を守ることが、唯一最大の目標とした。つまり、日本政府のとった態度は、目前にある状況さえ解決すれば良いんだと解釈できる。それに対して西独は、それに降伏した後に何が起こるかを考えた。そしてこれは、一種の戦争であると認識するに至った。一方、日本政府としては、それは一つの突発的な事件としか考えなかった。そこに日独両政府のとった根本的相違があったということですね。

花井　私はこの問題は戦後三十三年の時間の経過が日本と西独とではどうであったか？ということが象徴的に出てきた問題で、単なるハイジャック事件で解釈するよりは、安全保障とか、国家の威信「民主主義をどう考えるのか」というような大きな背景を持っていると思うんです。そこから見まして、日本が戦後、幸いにして、アメリカの過保護の下でヌクヌクとやってきた。加えて、海に囲まれて一京で開かれた国際ジャーナリスト会議での西独のD・ファイト氏の話を参考にして申しますと、西独の新聞は、政府と同様、今回の事件は自由と民主主義体制に対する挑戦と認識し、テロリストとの戦争だと考えている事情もあり、大陸に於ける激しい国際政治の中に巻き込まれずに、非常に恩恵的な三十数年を送ってきた。一方、西独はかなり自主的に自分達の国家を再建していった。それは彼らの国民性であったかもしれないし、欧州という激動の中に身を置いたことが、西独にあああいう厳しい対処策をとらせることになったと思います。戦後三十三年、更にさか昇って国民性とか、歴史・伝統の違いをマザマザと見せつけられた。同じ敗戦国でありながら、いつの間にこれだけの差ができてしまったのかとツクヅク考えさせられますね。

乗っ取られたDC-8の同型機

西独プレスの良識

三好　まったくその通りだと思います。そこで、具体的に「プレス」の場合について、西独のプレスのとった態度と、日本のプレスのとった態度とを比較してみようと思います。最近、東京で開かれた国際ジャーナリスト会議での西独のD・ファイト氏の話を参考にして申しますと、西独の新聞は、政府と同様、今回の事件は自由と民主主義体制に対する挑戦と認識し、テロリストとの戦争だと考えている事情もあり、大陸に於ける激しい国際政治の中に巻き込まれずに、非常に恩恵的な三十数年を送ってきた。一方、西独はかなり自主的に自分達の国家を再建していった。それは彼らの国民性であったかもしれないし、欧州という激動の中に身を置いたことが、西独にあああいう厳しい対処策をとらせることになったと思います。戦後三十三年、更にさか昇って国民性とか、歴史・伝統の違いをマザマザと見せつけられた。同じ敗戦国でありながら、いつの間にこれだけの差ができてしまったのかとツクヅク考えさせられますね。

「民主社会守る」責任問われる日本マスコミ

危機時代の報道界

テロ事件という非常事態に於ける、マスコミ報道のあり方について、本学外国語学部教授でもあり、元東京新聞論説委員を歴任されていた、漆山成美氏に、現在に於ける新聞、マスコミの問題点を中心として指摘・考察してもらいました。

現代社会の様に、新聞と一題を投げかける。その一つというものの影響力が非常に大きくなってきますと、ちょうど企業において「社会的責任」が問われるようにプレスにもプレスが「自由」であるが為の社会的責任・国家的責任というものがあると考えます。しかし戦後の日本では、そういったものが問われなかった。だから何を書いても良いとか、どんな虚偽報道しても良いとか、またどんな二枚舌を使っても良いとかいう風な事になってしまった。

今日、特に問題となっているのは、新聞の二枚舌問題で、日本のマスコミ界に流れる一種奇妙な反体制ムードに左右されてか、自由圏の報道には手厳しく、客観的な報道姿勢をとるが、こと共産圏の報道となると全く相手の主張をう呑みにするか、あるいは、同調的姿勢をとる。こうした事が起きる要因の一つに、共産圏報道をする場合には、相手国の主張する原則を受け入れなければ、特派員さへ送ることも困難な場合が多いのです。（例えば中国）。

この二枚舌問題の他に、とかくマスコミは感情的描写や誇張報道に走りがちだということです。だから、ある状況が余りにも拡大されて報道され、現況を冷静に客観的に認識することが難かしくなったりする。ここでは、これを一種のマスコミによる「擬似的環境」とでも表現しておこう。

そこでもし戦争と平和の問題に於てこのような虚構が作られた場合、深刻な問題に、民主主義社会に於ても、政府が唯一の合法的暴力の所有者であることをはっきりしておかないと国内政府に対する反体制運動として出てきているんです。

彼らは、しばしば暴力的な方法でもって正当な演説会を妨害したり、壊したりして力を誇示した。従って暴力により正当な政府が麻痺する怖さを、西独はよく知っていたと言えよう。もし、正当政府が、そのような暴力行為を抑えられなければテロリストの暴力に対しては、アンチテロの暴力という「私的暴力」が出てきて〝内乱〟に突入という最も恐るべき事態を招き兼ねない。だから今回の西独強硬策は、ファシズム・ナチズムを防ぐ道であり、その意味からシュミット政権をヒットラーになぞらえるなど見当違いも甚しい。要するに

京都産業大学新聞綱領

京都産業大学新聞局設立準備委員会は前新聞局の反省をふまえ以下のことを宣言する。

京都産業大学新聞は志学会の自治活動の重要な一部であり同時に学園内部の新聞であることからみても「教学の精神」の規定を基本的編集原則とすべきであると確信する。よって「自由の尊重」と「大学の自治」という二大理念をバックボーンとして編集を押し進めていく。

したがって、これを侵害しようとする勢力に対しては新聞がこれを防衛すべきものであることを確信する。

一条　京都産業大学新聞は京都産業大学に在籍する学生・教職員の思想的交流の場である。

二条　報道記事は公正で、特定の主義主張を排しあくまでもリベラルな立場を守る。

三条　記事の表現にあたっては、内容の正確を期し、感情的あるいは煽動的傾向を排す。

四条　京都産業大学新聞局は京都産業大学の自治発展に寄与するダイナミックな情報論評機関である。

五条　京都産業大学新聞は学園内部の広汎な意見をその紙面編集に反映すべきである。

六条　京都産業大学新聞局は全学友とともに学園内部における学問研究、思想表現の自由擁護のために奉仕する。

以　上

昭和五十二年十二月十二日

新聞局設立準備委員会

書評

「誰も書かなかった スウェーデン」

いつからか電車やバスに「シルバー・シート」なるものが設けられるようになった。座席の一角に貼紙があって四～六人ほど座れるようになっているわけです。

因に、ソ連の新憲法には親孝行が規定されています。親孝行がです。

一体、シルバー・シートとは何なのだろうか。それは有効だというのだろうか。福祉の一環だとは思うが。しかし、本当に福祉といえるのだろうか。吐き逸

えてはいけない。老人を一角に追いやり、身障者を一角に追いやる。老人は老人と、身障者は身障者と隣り席である。座席の一角に貼紙があって四～六人ほど座れるようになっているわけです。

因に、ソ連の新憲法には親孝行が規定されています。親孝行がです。

一体、シルバー・シートとは何なのだろうか。それは有効だというのだろうか。福祉の一環だとは思うが。しかし、本当に福祉といえるのだろうか。吐き逸

老人や身障者は、特別扱いや一所に閉じこめられることを望んでいるのだろうか。そうすることが福祉なのだろうか。

この豊かではあるが、福祉の遅れた国、日本で、これからの福祉政策でどんな障害があるかわからない。そんな日本にとって福祉国家を参考にすることは必須

である。そんな意味で以下の本を紹介します

「誰も書かなかったスウェーデン」武田龍夫著、サンケイ出版。

著者である武田龍夫氏は現在、デンマークに在住するスウェーデン通であり氏のスウェーデン滞在十年という経験から書かれたのがこの本である。

美しい森と湖の国、福祉

王国、フリー・セックスの国と、スウェーデンの代名詞は多い。

しかし、現実は?。それらの表の美しい顔も裏を返せばやはり難問を抱えた苦悩の顔がある。

これほど行き整った福祉国家で、国民の不満があろうとは。ましてこのような政府が政権の座から降ろされるわけがない。ところが、76年の選挙で長年政権の座にあった社民党が、敗れたのであった。

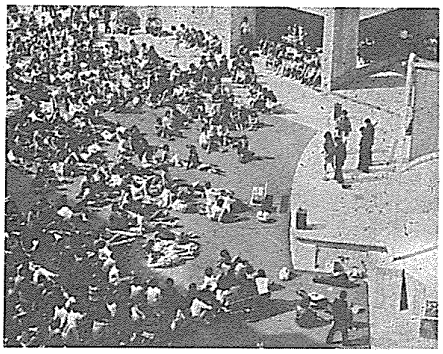
福祉に満足している筈の国家で、何が国民の不満を

学内散歩

私は、今の大学が、大学進学する青年は法的に義務づけられたり、他人の意志に強制されたりしたのではなく自分自身の自主的決意によってどうしても最高学府で最高の教育を受けたいという熱意に燃えた青年であるはずである。

しかし、大学が全国的にマスプロ化し、更に現代社会が思想的、精神的に混沌としてきた結果、学生によっては真理探究の姿勢は、しだいに失なわれつつあり、他者への責任転化と、独善的要求の押しつけ、果ては、学生間でデマや誹謗、中傷を投げつけ合うような醜態を演じているのである。

また産大を含めて、今の大学生はあまり勉強しない。それは、中学、高校と最も遊びたい時期に、受験準備に追い廻され、灰色の青春を歎いていたに違いない。その反動で、大学に入ったら思い切り遊んで欲求不満を解消しようという心



招いたのだろう。

福祉には金がかかる。高福祉高負担という言葉のとおりだ。この金は、税金以外の何物でもない。高負担は、税金を払う国民が負うのである。高い福祉を望めば高い税金を払わなければならない。こんな仕組みの中では、働いて一生懸命働いて得た金が、情容赦なく税金として取り上げられてしまう。高所得者はたまったものじゃない。働かなくても生活は保障されているのだから。ここに高負担という不満が生まれるのである。日本ではどうか。国民は減税と高福祉を一緒に訴える現状である。日本のように、戦争もしていない、福祉もこれからの国で、税金の負担を不満とするのはエゴ以外の何であろう。このような国民の意識で、どのような前進があるだろうか。

スウェーデンの老人福祉は高度なものである。老人ホームには近代設備が整い女性看護人がついていてくれる。

しかしそれとて、老人が皆このホームに入れるわけではない。その順番を待ちわびている老人の多いこと。ただ一つ、この老人達、ホームへ入れた老人にも入れない老人にも言えることがある。彼等は厚い福祉に守られているようだが、全く孤独である。社会から隔絶され、無視されているのである。老人の最上の喜びは、楽しく人と語り合うことだという。何という皮肉!、マスコミでの活躍からだろう。福祉の国の老人の楽しみはそんなことなのであろうか。いや、スウェーデンの老人だけではない。どの国の老人も、社会から隔絶されたくはないのだ。一緒に生きていきたいのだ。それを福祉の名の下に無視できるのだろうか。老人も生きている。身障者も生きているのだ。

シルバー・シートだけがシルバー・シートではないのでは……。

「野望」

もう一冊は、わが京都産業大学法学部教授小谷秀二郎氏の処女作品「野望」です。小谷秀二郎教授は国際政治学専攻。北朝鮮研究・防衛問題等に多くの論文・著書があります。

この作品では、村上忠太なる主人公が、華々しく文壇に登場し、マスコミ界でちやほやされ活躍し、さらに政界進出までねらう中で、女にとっての男の理想の姿を追求する。

田代道代は日野勉一郎という男によって女となり男性像を確立した。生活力(親の巨額な遺産)ある女。

悠子は日下部海道の娘で父親から男性像を確立した弱々しいお嬢さん。

日野と日下部は共にその世界では大御所・重鎮という名の実力者であり、強い男である。そして共に、村上忠太の将来性に関心をもった男達である。

道代は忠太のそのデビューから、マスコミでの活躍からだろう。福祉の国の老人の楽しみはそんなことなのであろうか。いや、スウェーデンの老人だけではない。どの国の老人も、社会から隔絶されたくはないのだ。一緒に生きていきたいのだ。それを福祉の名の下に無視できるのだろうか。老人も生きている。身障者も生きているのだ。

シルバー・シートだけがシルバー・シートではないのでは……。

それも灰と化しかけている。しかし、学生であることを、京都産業大学という大学で学ぶ学生であることを忘れてはならない。そこで、この大学を心から愛し、真の学問探求が保証されるよりも弱さを女に見せてしまうことになってしまい、全ては終った。

いったい女は、どんな男を愛するのか。強い男とはどんな男か。

最後に男が捨てられるという異色の結末が何か面白くもあり、面白くもなし。

そして、今後、京都産業大学が、また、全国の各大学において、本当に真理と学問の場となり、また、真の学生運動が生まれ出て大学本然のあるべき姿を取り戻していくことを願う。